

# おじいちゃんに参加した戦争

北村 正平

若宮三丁目

純子も学校の勉強で知ったことと思いますが、日本は狭い国土に溢れる人口のはけ口を求めて、満州事変を引き起こし、中国の東北部に満州国をつくり、更に中国全土に侵攻を及ぼした日中戦争に留まらず、大東亜共栄圏という美名のもとに大東亜戦争へと、戦線は東南アジア全域へと拡大しました。そして遂には、先進国米英を敵とした太平洋戦争へと突入。あげくの果てには日本全土まで空襲で焦土と化し、広島・長崎に原爆を落とされ、無条件降伏というかつてみない敗戦の憂き目を招いたわけです。

敗戦後は幸いにもアメリカの援助のもとに国民が死力を尽くし、困苦欠乏の中から、不死鳥のように日本経済の復興発展を成し遂げ得たことは、日本民族の優秀さを世界に示した快挙といえましょう。これも戦争を放棄し、その戦力を平和産業に注ぐことができたからです。

さて、私が純子に語れる戦争の話とは、どんなことかといういろ考えましたが、私が二四歳で参加し、この目で見た日中戦

争の実態を語る事がよいと思ったので、今まで誰にも話したことのない恥ずかしい話ですが書いてみることにしました。

私は昭和十二年に日中戦争が勃発してから、丸一年目の十三年七月七日に赤紙一枚で召集され、ろくな訓練も受けず、中国中部にあたる大別山攻略戦に、兵站部隊（兵たん）の陸上輸卒隊員として参加しました。第一線の戦闘部隊へ武器弾薬や食糧を輸送する隊です。後続部隊なので弾の下を潜（かく）ることは稀でしたが、私の出遇（あ）った体験の幾つかを書いてみましょう。

戦地に着いての初めての任務は、敵が落としていった橋の架け替えをするために工兵隊の手伝いをして駐屯したときです。兵站基地に着くまでの途中の鶏肉や野菜などは、すべて現地人の作ったもので賄（まわ）われることになっていました。そんなある日、近くの農家から強制して集めたものを、天秤（てんびん）でかつがせて来た農民ら三人が、荷を降ろし田の畦（あぜ）を帰ってゆくところを、後から銃で撃ち殺す日本軍のやり方を目撃したときは、何とむごいことをするのかと、己の良心を恥じました。前線でのこと、生

かして帰せば兵力などを知られ、いつ逆襲されるかわからないというのです。戦場は人間を鬼にすることを知りました。

もう一つの出来事は、別の駐屯地でのことで、私たち新兵も交代で近くの農家へ徴発に行くのですが、どこの家も逃げてしまつて誰もいないので、残り少ない野菜などを引き抜いてくる程度なのですが、たまたま、当日の当番兵は徴発量が少なかったで、クリークにいた家鴨を面白半分<sup>ほんぶん</sup>に狙い撃ちをしていたところ、民兵に包囲され、逃げおくれた戦友二人が彼らの銃撃に会い、むぎむぎ命を落としてしまつた事件です。どんなにやりきれない思いにさいなまれたことか。これも戦争もきびしい現実でありました。

大別山攻略の前哨戦である漢口に入る前は連日の行軍で、炎天下に沸いたたんぼの泥水を沈澱させて何度嘔<sup>す</sup>つたことか。下痢や日射病、熱発患者も出ました。小休止の声がかかれば、食べるより、ばつたり倒れ眠りをむさぼつたものです。いよいよ漢口の街が見えるという丘で昼飯の命令が下されました。先を争つて駆け上つた丘の上に見たものは、なんと、何百という累々たる中国兵の遺棄死体ではありませんか。漢口陥落一週間というのに死臭はなく、ぼろきれのような軍服の骸<sup>なみかた</sup>が風に吹かれており、漢口攻略戦の攻防の激烈さを想像し身の毛がよだちました。ここで、初めて戦争の凄惨さを思い知らされました。

私が銃弾の恐怖にさらされたのは、漢口兵站本部に落ち着い

てから、どうしたわけか小隊から二人が指名され、いよいよ大別山攻略基地への糧秣<sup>りょうま</sup>輸送に、トラック十数台を連ねて山地へ入ったときです。まだ小高い山上には敵の敗残兵がいて、トラックが射程距離に入るやいなや一斉に単発銃を撃つてきます。味方の山砲隊が分解した砲をかついで反対側の山に据<sup>す</sup>えにかかります。その間隙に飛び降り山田の畦<sup>し</sup>かけに身を隠すのですが、敵の銃弾は紅葉した木の葉をかすり、田の面をかすめ、プスツプスツと身辺間近の土くれを弾き上げる。瞬間、身の危険にある恐怖感に襲われましたが、弾はなかなか当たらず、静まったので

そのうちに山砲が敵のいる山上に撃ち込まれ、静まったのでトラック隊は前進しましたが、行く先々で味方の砲車が破壊されていたり、馬の死骸がぶざまに転がっていたので、先発隊にも死傷者が出ていたのではと思ひました。それにしても、中国の戦場で使われていた日本軍の歩兵銃や山砲にしても、みな日露戦争当時のものばかり、あれでよく戦争ができたものだ、と、兵隊たちの苦勞も知らず、民間召集兵はあきれたものです。

私たち陸上輸卒隊の戦死者は、殆どが移動中の砂塵のため車が池に落ちたり、輸送船の暗渠<sup>あんきょ</sup>に誤つて落ちるなどで、戦闘部隊から見れば極めて恵まれた兵隊であつたといえます。

大別山攻略も終結した私たちの部隊は、十五年二月十一日建國の日に召集解除の命令が出され、運よく僅か一年八か月で本隊の甲府に帰還しました。

私は直ちに会社に復帰しましたが、会社の南方派遣員として、十八年五月、船団とともにジャワへ渡りました。現地の軍官民のための出版物の配給業務や現地民への宣伝刊行物を全島へ普及販売する活動に従事していましたが、敗戦の一年後に妻子の待つ故郷に帰還した次第です。

思えば、太平洋戦争にしても、英米連合軍の空海軍力をはじめ、電波科学兵器や物量面でも明らかに劣勢な戦争を、なぜ收拾のつかぬまで拡大したのか、その無謀さは愚かという言葉しかないかもしれません。こうした愚かな戦争に尊い青春を捧げていった人々の死も哀れですが、戦災や被爆された方々の霊を安らげ、死を無にしないためには、再び軍市政権を許してはならないことを銘記してほしいと思います。

地球上で、今なお、どこかで戦争が続けられていることは、悲しむべきことです。戦争を望んでいる人はいないと思うのに、なぜ戦争が絶えぬのでしょうか。武器を売る死の商人がいる限り、戦争はなくなることはないといえます。一人一人の人間には戦争は悪と思われていても、これが他国間や民族間の憎しみや利害がからむと、收拾がつかない事態が発生してくるから始末が悪いのです。ましてや、原水爆が多数保有されている現在、いつどんな形で人類や地球が破滅に導かれるか、その安全の保障はないのですから困ったものです。

二二世紀を担う純子たち世代が、こうした愚かな戦争を繰り返

返さないように、しっかりと日本の民主憲法を守ってほしいと思います。

